



Title	＜書評＞『四捨五入殺人事件』（井上ひさし著，新潮文庫，380円）
Author(s)	徳本， 浩行
Citation	大阪公衆衛生. 1994, 65, p. 13-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83814
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『四捨五入殺人事件』

井上ひさし著
新潮文庫 380円

マイナスはなにもかも自分のせいにしてしまふ、下級官僚魂をもつ腰の低い成郷市役所（架空の市）の観光課課長補佐の岡田の車に乗せられた、新鋭作家の藤川とベテラン作家の石上は、豪雨の中、山奥の鬼哭温泉へと連れてこられます。

市の記念事業の講演依頼を受けふたりは来るのですが、その宿泊先として鬼哭温泉の高屋旅館に泊まります。折りからの豪雨のせいで唯一まちとつながっている橋が流されてしまい、陸の孤島いわゆる密室状態に閉じ込められてしまいます。

北と東と南が鬼哭川、西が高塔山と四方が塞がっている鬼哭温泉は、書店も図書館も映画館もなく、また、周囲の町や村ではよく見えるのに地形のせいで、画面が4つも5つも重なって見えるためにテレビもない山奥。そこで連続殺人事件が起こります。

高屋旅館の女主人の加代は、先祖代々鬼哭地域の領主で、百姓たちに苛斂誅求（かれんちゅうきゅう）をほしいままにしてきた罪滅ぼしに、今は農業改良普及員としてつくっていますが、殺されてしまいます。ベテラン作家の石上が容疑者扱いされ、新鋭作家の藤川がその推理にのりだします。過去からの百姓の怨念か？

ところどころにヒントが隠されていて、それがそれぞれ意味をもっています。事件は最

書 評

後に大逆転してしまいます。

（大阪市環境保健局環境管理課 徳本浩行）